

〔書評〕

中西宇一著

『古代語文法論 助動詞篇』

著者中西宇一氏は古代語文法の著名な研究者であり、特に助動詞の研究は学界で高い評価を得ている。我々は本書によって、氏の助動詞研究の全貌を知ることができる。本書の内容、構成は次のとおりである。

- 第一章 自動詞と他動詞——格助詞「に」と「を」の対立を通して——
- 第二章 使役と受身——「す」「ます」「しむ」と「る」「らる」——
- 第三章 自発と可能——「る」「らる」「ゆ」「らゆ」——
- 第四章 発生と完了——「ぬ」と「つ」——
- 第五章 「けり」の表現性——真実性と確信性——
- 第六章 「べし」の推定——様相的推定と論理的推定および意志——
- 第七章 個人的判断としての「めり」の推定——「けり」との対比——
- 第八章 「らし」と「らむ」の推量性
- 第九章 反実仮想の表現——「まし」の意味構造——
- 第十章 否定の助動詞を中心とする助動詞の二分類——助動詞の相互

承接と意味との関係——

本書は、助動詞に関する論文九編と動詞の自他に関する論文一編か

高山善行

ら成り、巻末に「引用歌および引用文索引」が付されている。収められた論考は雑誌などに発表されたものであり、それらのほとんどが基本文献となっている。この度、一書としてまとめられたことは、この分野の研究者にとつて実ありがたいことである。ちなみに、評者自身も学部学生の頃から著者の論文を読んで学んできている。本書を評するに、評者のごとき初学者が適任とは思えないが、初学者なりに、読み取ったこと、感じ取ったことをできるだけ率直に述べてみようと思う。ただし、紙数の関係もあり、すべての章を取り上げる余裕はない。そこで、いづれもモダリティに関わるという内容のまとまりと評者の現在の興味から、後半部第六章と第十章を取り上げ、評を試みることにしたい。

二

第六章は「べし」の意味についての論である。著者は「べし」に二つの基本的意味を想定する。すなわち、「ソウダ」の意を表す「様相的推定」と、「ハズダ」の意を表す「論理的推定」である。「十月しぐれの常か我が背子がやどの黄葉散りぬべく見ゆ」(万葉・十九・四二五九)が前者、「天地を照らす日月の極みなくあるべきものを何を

必ずしも十分なものであるとはいえないが、与えられた状況からみる限りでは、私にはそのように判断される」(二二六頁)とし、「極めて控え目な、私の個人的判断」を表すとする。この説明は評者にはわかりにくい。判断に関して、「十分」「控え目」というのは、一体どういうことであろうか。「十分」「不十分」というのは「根拠」について言えることであろう(他の箇所では「推定根拠の不十分さ」のように用いられている)。「控え目」というのは文の述べ方の問題ではないだろうか。また、「推定判断」とは本来、発話者の個人的なものであるから、「私の個人的判断」の意味するものが明瞭でない。抽象的な意味の問題だけに、わかりやすく説明することは難しいけれども、用語についてはもう少し配慮がなされてよいのではなからうか。

「めり」の意味は通常、「推定」「婉曲」の二種類が立てられている。本章では、この大まかな分類を批判し、意味の微妙な差異に分け入って、興味深い観察を行っている。もちろん、このような細分化の方向は必要であろう。だが、評者は、「分ける」とは反対の方向、つまり、「推定」と「婉曲」の連続性を明らかにし、両者を「繋ぐ」論もまた重要と考えている。「推定」の意の希薄化、それに伴う「婉曲」の例の増加が「めり」の消滅とどう関わるだろうか。本章を読んで考えさせられたことの一つである。

四

第八章では、「らむ」と「らし」の推量性の違いが論じられている。まず、「らむ」について以下のように説明されている。「秋されば置く露霜にあへずして都の山は色付きぬらむ」(万葉十五・三六九九)の場合、推論過程は次のようになるという。

- ① ここ、浅茅山がしぐれの雨にもみじした。今はもみじする季節である。
- ② もみじする季節になれば、どこにても同様にもみじするものである。
- ③ 故に、今は、ここにおけると同様に「都の山は色付きぬらむ」

①は「現実の根拠」、②は「推論の前提となる一般的な把握」、③は①②から導かれる「推量判断」を示しており、「らむ」の推量は、現実を根拠としながらも、それを一般的な関係において把握することによって導かれる想像的な推量であるとみることがができる。(二二二頁)という。このような、一般論を前提とする関係把握は、「べし」の(論理的推定)と近い面がある(「べし」と「らむ」の対比については一七九頁参照)。この把握のあり方は、「べし」の意味と「む」系の助動詞の意味とを繋ぐポイントとなろう。

一方、「らし」については以下のようなのである。「霞立つ野の上の方に行きしかばうぐひす鳴きつ春になるらし」(万葉・八・一四四三)の場合、根拠と結論との関係は、「うぐひすが鳴くと、もう春だ」「うぐひすが鳴いたことは、すなわち春になることの現れだ」となる。「らし」の推量は、根拠が結論を現実において実証するものとして把握されており、かかる根拠と結論との現実における直接的な関係把握に基づいて、結論が直接的に導かれる推量である(二二三頁)という。確かに、「らし」の意味は「む」系の助動詞が担う「推量」とは異なり、むしろ「断定」に近いものがある。「言はむすべむすべ知らず極まりて貴きものは酒にしあるらし」(万葉三・三三四二)のような、一連の讃酒歌に用いられた「らし」はそうした例であろう。以上簡単にまとめてみたが、本章で述べられている推量性の違い

は、見通しとしては大筋正しいように思われる。後は、それが「らむ」「らし」の構文的特徴の差異と対応づけられ、跡付けられるかどうかであろう。

「らむ」については、不定語（な）に「たれ」など、「や」「か」と共起することができ、連体修飾節内に生起できるという特徴がある。「らし」については、係助詞「し」との共起、知覚動詞（見ゆ*「開ゆ」）との対応、終助詞「も」の下接、副詞「うべ」との共起、といった特徴が見られる。本章で言う、推量性の違いとは、意味的観点から導き出された仮説である。構文的特徴の差異とつき合わせ、仮説を検証する作業が残されているように思う。

また、違いを見るだけでなく、同じ「推量の助動詞」として対比する上での前提となる意味の共通性をどのように保証してやるかという点も忘れてはならないだろう。

*内田賢徳（一九九二）「助動詞ラシの方法」（吉井巖編『記紀万葉論叢』塙書房）に指摘がある。

五

第九章では、助動詞「まし」を中心に、反実仮定を表す文の意味構造を考究している。本章では、反実仮定の文がAとDの四類に分類される。たとえば、Aタイプ「あしひきの山より来せばさ雄鹿の妻呼ぶ声を聞かましものを」（万葉・十二・四八）については以下のように分析されている。

①もしも私が山手の道を来たならば、雄鹿の妻を呼んで鳴く声を聞くことができたであろう。（反実における〈条件・帰結〉の関係）

②（シカル）私は山手の道を来なかつたので、鹿の声を聞くこと

ができなかつた。（現実における〈原因・結果〉の関係）

③私は鹿の声を聞きたかつた。（ソノタメニハ）山手の道を来ればよかつた。（そうすれば鹿の声を聞くことができたであろう）（反実の裏返しとしての希望・意志〈目的・手段〉の関係）

④（トコロガ）山手の道を来なかつたので、鹿の声を聞くことができなかった。――残念なことをした。（③の希望が現実には実現し得なかつたことの後悔、不満の情）

このようにして他の三タイプについても意味構造が明らかにされている。そして、反実仮定文の意味構造の全体像が、わかりやすく表（二七六頁）にまとめられている。「情意性」と「論理性」の対立を軸にした分類は完成度の高いものであると思う。ただ、「まし」と「む」との対比については、やや不徹底な印象を受けた。反実仮定文における共通性については示されているが、両者の差異についても知りたく思う。

読んでいるうちに、そもそも反実仮定文（反事実条件文）の解釈がどのように成立するのかについて考えさせられた。この問題に関して、現代語については、興味深い研究がいくつかある。古代語に関しても、助動詞論の枠にとらわれることなく、反事実解釈の成立条件そのものの検討が必要と思われる。そもそも古代語において、「まし」という反事実性の表示形式がなぜ必要とされたかという理由について、明らかにしていかなければならない。

*田窪行則（一九九三）「談話管理理論から見た日本語の反事実的条件文」（益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版）など

第十章は、本書における助動詞の個別論を集成する形で述べられ、総論的な内容になっている。著者は、「否定の助動詞」との承接を基準にして、すべての助動詞を二つに分類する。分類の内容は以下のとおりである。

「否定の助動詞」に対して上位するもの(ⅡⅠ類)は、「格の助動詞(る、らる、す、さす、しむ)」「敬語の助動詞(奉る、給ふ、侍り、など)」「態の助動詞(つ、ぬ、たり、り)」「希望の助動詞(まほし)」である。一方、否定の助動詞に下位するもの(ⅡⅡ類)は、「回想の助動詞(き、けり)」「推量の助動詞(まし、じ、らむ、む、けむ、らし(けらし)、めり、なり)」である。「べし」は、否定の助動詞に上接も下接もするが、上接、下接で意味の使い分けがある。結局、「否定の助動詞を中心として、上位に対象的な意味をもつⅠ類の助動詞が、下位には作用的な意味をもつⅡ類の助動詞が位置するという、しかも、Ⅰ・Ⅱ類それぞれに、より対象的なものほど上位に、より作用的なものほど下位にくるという承接関係をもつ」ということである。相互承接という客観的な方法によって、助動詞全体の表現性を見ていこうとする点には賛同できる。

さて、本章を読んで気づいた点について述べてみたい。

「つ」「ぬ」は「ず」に上位するⅠ類とされている。しかし、実際は、「つ」「ぬ」は「ず」に上位しにくいようである。たとえば、『源氏物語総索引』(勉誠社)によれば、「ざりつ」四八例に対して「てず(ぬ)」は一例もない。「ぬ」にいたっては、「ず」との承接そのものが見あたらない。上位する例は、和歌などに若干あるのだが、それを

もって「つ」「ぬ」が「ず」に上位すると位置づけるのはいかがであるか。

「む」が「き」に「らし」が「けり」に下接する」と位置づけるが、「き」と「む」が結合して「けむ」になるとすれば、それは成立論レベルのことで、実際の承接において、「む」が「き」に下接することはない。「けらし」については、「けり」の形容詞形であるとする説(竹岡正夫説)もある。成立論と実態論とを分けておくべきではなからうか。

「べし」に「めり」「らし」が下接するとき、「べし」の「推定」に「めり」「らし」の「推定」が加わるとする。だとすると、一つの文において、「推定判断」という主体的判断が二つ重なることになる。それでよいか。それらの助動詞の単独用法における意味を足し算のような形で複合用法に持ち込んでよいだろうか。

以上のような点が疑問に思われた。本書の中で「否定の助動詞」の研究に関する章が立てられ、その論を踏まえた上での総論であれば、いっそう質が高まったことだろう。

助動詞相互承接の研究はかなりの蓄積があり、大まかな傾向についてはよくわかつている。だが、細部についてはまだまだ観察が十分でない部分がある。研究者個人の調査データが他の研究者と共有される形で公開されていないことが大きな問題であろう。今後インターネットの利用などによって解決されなければならない。

*ツ、又否定辞が下接する例については、近藤明(一九八九)「助動詞ツ・ヌに否定が下接する場合——ヌ+デを中心に——」(『国語学研究』二九)が詳しい。なお、本章に関しては、北原保雄(一九八一)「日本語助動詞の研究」(大修館書店)第五章第六節においての確な批判がなされている。

ここで本書の方法について述べてみたい。本書では、主に意味的観点から助動詞の研究が行われており、どの章においても質の高い個別論が展開されている。本書には意味中心の助動詞研究の良さが随所に出ている。とりわけ、条件表現、モダリティに関する記述は、現代語の研究者が読んでも示唆を得られる点が多いであろう。

一方、本書の方法については以下の点が問題となろう。

本書では助動詞が意味的観点から分析されており、多くの成果を挙げている。その反面、構文的機能についての記述が切り捨てられているように見える。意味中心ということで一貫した良さはあるが、やはり意味の面だけでは分析に限界がある。構文的機能と意味とを統合的に見ていくことによって文構造と関連させ、「係り結び」など他の文法現象の解明に資するという方向性もあり得るのではなからうか。

第二に、本書では助動詞の用例を分類・類型化していくという帰納的方法が取られている。研究の基礎的段階としてはこれでよい。だが、この作業を積み重ねていくとして、はたして助動詞研究、文法研究が理論的に深まっていくだろうか。分類、細分化はなされるだろうが、結局は現象を整理するにとどまると思われる。生成文法のように、非文を対象にした演繹的方法を用いて、現象の説明がなされるべきであろう。

第三。本書には参考文献が挙げられていない。これまでの古代語助動詞の研究においては、同じような考え方が用語を変えたただけ、あたかも新説のように発表されることが繰り返されてきてい

る。論である以上、研究史の把握、位置づけということに注意が払われてよいのではないだろうか。

評者には以上の点が問題と思われるが、結局は立場の違いによるものであつて、けつして本書の価値を減じるものではない。ただし、それらの問題は伝統的な助動詞研究一般の問題でもある。方法の転換が必要とされる段階に来ているということであろう。

最後に。本書から学ぶ点は実に多かつた。著者は、助動詞の大量の用例を扱いながら、一つ一つの用例の解釈をけつして疎かにしていない。地道な用例解釈の積み重ねがいかほど大切であるか、改めて感じずにはいられない。著者の研究が多くの研究者から信頼され、しばしば引用されるのも当然であろう。本書に収められた研究成果は、これからも価値を失うことはあるまい。この分野の研究者にとつては、まさに必読の書であろう。前半の章を取り上げることができず、前著『日本文法入門——構造の論理——』（和泉書院）との関連についても言及できなかつた。理解不足、読み違いなどもあるう。

すべて著者には御寛恕いただくほかはない。
 平成八年七月五日発行 和泉書院刊 A5判 三二三頁 本体価
 格一一三三〇円

——大手前女子大学助教授——
 （平成十年五月三十一日 受理）